

## トーマス・マンの文体：G. グラス, H. ヘッセと比較して

大羽, 武

<https://doi.org/10.15017/2332648>

---

出版情報：文學研究. 81, pp.71-107, 1984-02-25. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：

# トーマス・マンの文体

—G. グラス, H. ヘッセと比較して—

## 大 羽 武

本論はトーマス・マンの『トーニオ・クレーガー』(1903)の文構造を分析し、ギュンター・グラスの『猫と鼠』(1961)及びヘルマン・ヘッセの『車輪の下』(1905)の文構造と比較することによって、しばしば複雑な建造物に喩えられ、重畳体と評される、マンの文体について考究したものである。次の各節より成る。

1. 文の長短
2. 文構造
3. 副文の従属的階層
4. 副文の結合形式
5. 対比叙法と矛盾叙法
6. 結び

### 1. 文の長短

『トーニオ・クレーガー』では全文を分析の対象としたが、『猫と鼠』及び『車輪の下』では作品の冒頭から100個の文を抽出し、分析を試みた。比較のため『猫と鼠』、『車輪の下』を取り上げたのは、『トーニオ・クレーガー』がトーマス・マン28歳の時の作品であるのと同様に、二作品共作者の前半期に成立した作品である、という理由に基づく。

文とは何であるか。その定義は種々なされているが、ここではヘルマン・パ

ウルの『言語史原理』<sup>1)</sup> や W. アイヒラー、K. ビュンティンクの『ドイツ文法』<sup>2)</sup> の定義に則り、定動詞を欠いている語、或いは語の結合も文とみなした。また具体的には、文の長短をその中に使用されている語数によって測定するわけだが、その場合文や語というのはハンス・エガースの定義にしたがった。即ち「ここで文と呼ぶのは、著者がコンマやセミコロンといった軽い句読点によってではなく、終止符、疑問符、感嘆符、またはまれにはコロンのような、明確な句切りの印によってその末尾を明したすべての意味統一体 (Sinneinheit) のことである。」<sup>3)</sup> 及び「この場合《語》 (Wort) と呼ばれるものは、左側を空記号によって、右側を空記号または句読点によって他の同じような書記単位から分けられている書記単位のことである。」<sup>4)</sup> という定義にしたがった。それ故分離動詞の前綴が分離され後置されている場合、この前綴も一書記単位 (graphische Einheit) として語数の中に含まれることになる。

以下の表中では „Katz und Maus“ は K. u. M. と、„Unterm Rad“ は U. R. と、„Tonio Kröger“ は T. K. と略記する。

表 I

作 品	文 の 数	総 語 数	一文あたりの平均語数
K. u. M.	100	2,172	21.7
U. R.	100	2,202	22.0
T. K.	1,119	21,379	19.1

一文あたりの平均語数はグラスとヘッセがほぼ同数でマンより2.6~2.9語多い。実は、マンとグラスの文は長いと考えていた筆者にとって、この結果は意外であった。しかしながら、これはあくまで平均語数であって、20語前後の文を平均的に書く作家と文の長短の振幅が大きい作家との差異はここには現れていない。それ故、次にエガースの統計<sup>5)</sup> にしたがって、4語ずつのグループに分類し、その分散を調べてみる。

表II 文の長短

文中の語数	K. u. M. (文の数=%)	U. R. (文の数=%)	T. K.	
			文の数	%
1 ~ 4	9	7	137	12.24
5 ~ 8	23	14	194	17.34
9 ~ 12	8	6	151	13.49
13 ~ 16	15	13	135	12.06
17 ~ 20	11	11	118	10.55
21 ~ 24	4	6	83	7.42
25 ~ 28	4	12	59	5.27
29 ~ 32	7	13	49	4.38
33 ~ 36	3	6	40	3.57
37 ~ 40	2	5	23	2.06
41 ~ 44	2	1	39	3.49
45 ~ 48	3	1	22	1.97
49 ~ 52	2	2	20	1.79
53 ~ 56	1	2	15	1.34
57 ~ 60	—	—	14	1.25
61 ~ 64	—	—	5	0.45
65 ~ 68	—	—	—	—
69 ~ 72	1	—	5	0.45
73 ~ 76	1	1	3	0.27
77 ~ 80	1	—	2	0.18
81 ~ 84	—	—	—	—
85 ~ 88	1	—	—	—
89 ~ 92	—	—	2	0.18
93 ~ 96	—	—	1	0.09
97 ~ 100	—	—	—	—
101以上	2 <sup>(107)</sup> 130	—	2 <sup>(113)</sup> 116	0.18
計	100	100	1,119	100

三人共5～8語の文が最も多く、殊にグラスでは全体の23%も占める。しかし彼の場合、極端に長い文も多く、その振幅が大きい。ヘッセの文はその99%が56語以内の文に収まり振幅が小さい。マンの場合は両者の中間よりややグラスの方へ寄った傾向、即ち5～8語の文を頂点に116語から成る長文まで、な

だらかなカーブを描いて減少しているのが特徴である。

ルートヴィヒ・ライナースは Der Große Duden の第二巻 Stilwörterbuch der deutschen Sprache の序文 „Vom deutschen Stil“ で読み手の立場から「一般的に言えば、一文の語数は10~20語を越えてはならない。3~4語から成る短文、いわゆる喘息性のドイツ語 (Asthmadeutsch) は不自然であり、それ故美しくない。5~10行から成る文は、それを理解し易く表現することが可能な者のみを書くべきである。長すぎる文を避けるためには、いくつかのこつ (Kunstgriffe) がある。」と述べ、長すぎる文を書かないように助言している。無論彼の意見は文学作品に向けられたものではなく、praktisch な文に関してのものである。それ故エガースの統計<sup>6)</sup>のごとく „Rowohlts Deutsche Enzyklopädie“ や „Frankfurter Allgemeine Zeitung“ において 9~20語から成る文が、それぞれ38%、44%と高い比率を占めているのはしごく尤もなことである。読み手は無理な緊張を強いられることなく、自然の息遣いのうちにその内容を把握し得るのである。だが文学作品は、読者の理解を容易にすることを第一義として書かれるのではない。作品中には Asthmadeutsch や、5~10行の文どころか10行を越える文もしばしば現れる。

9~32語の長さの文を集計し、その比率を求めると、『猫と鼠』では49%、『車輪の下』では61%、『トーニオ・クレーガー』では53.17%となり、先の百科事典の68.61%や新聞の74.25%<sup>7)</sup>より低く、文学作品は実用書や新聞に較べ、はるかに多くの緊張を読者に要求する。三人のうちではヘッセの文が最も実用的な文に近く、読者にとってはかなり読み易い。以上のことはすべて、文の長短という量的な面に関してのことである。

## 2. 文構造

文相当句 (Setzung) も前節で述べたように一種の文とみなしているが、この節では独立して扱い、文を文相当句、単一文 (Einfachsatz)、対結文 (Satzreihe)、付結文 (Satzgefüge) に分類し、統計をとってみる。分類は次

のような基準で行った。

文相当句とは「文法的に完全な文の形になっていない発話で、そこにはとくに述語動詞がそして多くの場合主語も欠けている」<sup>9)</sup> 句のことである。感嘆詞や ja, nein, doch, bitte などによって終わっている文（あえて文といっておく）は無論のこと、たとえば定冠詞と名詞だけで成立している Die Ostsee! (T. K. S. 319) や副文を伴う次のような文も含む。

Und das Lichterspiel auf dem Fluß, das sanfte Schwanken der langen Angelrute, die Aufregung beim Anbeißen und Ziehen und die eigentümliche Freude, wenn man einen kühlen, feisten, schwänzelnden Fisch in der Hand hielt! (U. R. S. 13)

単一文とは一つの主語と一つの述語から成る文、及びこの主成分に付加語、補足語、状況語などの副成分が加わった文のことである。主語が欠ける、Sei froh! (T. K. S. 335) などの命令形も単一文として扱った。しかし、いくつかの独立文章が一部の要素を共有し、それらが集約されて一つの文を成す集約文は、一般に単一文として取り扱われるが、本論では定動詞に重点を置き、定動詞の数と等しい数の独立文章の結合とみなし、対結文として取り扱った。たとえば主語を共有し、並列接続詞 und で結ばれた次のような文である。

Dann zuckte er die Achseln und ging seiner Wege. (T. K. S. 288)

この文は二つの独立文章から成る対結文とみなした。

対結文とは二つ以上の独立した単一文が、並列接続詞やコンマ、セミコロン、場合によってはコロんで並列に結合された文で、上述したような集約文も含む。また一つ或いはそれ以上の文相当句と、一つ以上の単一文が並列に接続された、Und dann die See, — sie haben die Ostsee dort oben!... (T. K. S. 306) のような文は対結文、この場合は一つの文相当句と一つの単一文から成る対結文とした。

付結文とは一つの主文に一つまたはそれ以上の副文が関係代名詞、関係副詞、従属接続詞によって結び付けられた文や間接疑問文、及び *daß* や *wenn*, *obwohl* などの従属接続詞が省略された文のことである。さらに直接話法の内容文 (Inhaltssatz) やコロンの導かれる内容文も付結文に加えた。即ち、しばしばテキストに現れる直接話法は分析の対象として看過できず、Duden の „Grammatik“ の説明、「直接話法 (の内容文) は主文の四格目的語の役割を果たす、導入語によらない内容文である」<sup>9)</sup> を参考に、直接話法の内容文を目的語文とし、一種の副文とみなした。実際の分析にあたっては、次のような方法をとった。

»Famos!« sagte Hans. »Ich bekomme jetzt die ledernen Gamaschen, du, weil ich neulich die Eins im Exerzitium hatte...«  
(T. K. S. 278)

»Famos!« sagte Hans. これで副文+主文から成る付結文とし、»Ich bekomme jetzt die ledernen Gamaschen, du, weil ich neulich die Eins im Exerzitium hatte...« は意味的には Hans sagte の内容文であるが、Hans sagte は »Famos!« のみの主文とし、次の引用符の中の文は独立して扱い、主文+ *weil* を導入語とする副文から成る付結文とみなした。即ちこの場合にも第一節の文の長短で適用した、エガースの文の基準を参考にし、Hans sagte の内容文はピリオドまでとしたのである。それ故これは、二つの付結文に分けられる。殊に引用符の中が長く、ピリオドがいくつもあり、さらに数個の副文まで存在する直接話法の場合、二つ目の内容文以降は引用符の外に、即ち主文の支配力から脱しているかのごときものがある。それはすでに会話というより文章語である。このような場合、この直接話法の分析方法はきわめて妥当と思われる。コロンの導かれる内容文として次の例文を挙げる。

Ingeborg müßte nun kommen, müßte bemerken, daß er fort war, müßte ihm heimlich folgen, ihm die Hand auf die Schulter

legen und sagen: Komm herein zu uns! (T. K. S. 335)

コロンに続く内容文 *Komm herein zu uns!* は、*Ingeborg müßte sagen* の四格目的語文としての副文とみなした。

また副文が短縮された不定詞句、つまり *damit* の代りの *um~zu* 不定詞、*ohne daß* の代りの *ohne~zu* 不定詞、*(an) statt daß* の代りの *(an) statt ~zu* 不定詞、*als (auf) daß* の代りの *um~zu* 不定詞などの不定詞句及び分詞句は、機能的には副文と同じであるが、定動詞を欠いているという理由から副文として取り扱っていない。

a) 不定詞句の例

»*Verzeihung*«, *sagte Tonio Kröger, ohne den Blick von den vielen Büchern zu wenden.* (T. K. S. 313)

*ohne~zu wenden* は *ohne daß er den Blick von den vielen Büchern wandte* という副文が短縮された不定詞句であるが、副文とはみなしていない。

b) 分詞句の例

*Ihr braunes Haar, fest frisiert und an den Seiten schon leicht ergraut, bedeckte in leisen Scheitelwellen ihre Schläfen und gab den Rahmen zu ihrem brünetten, slawisch geformten, unendlich sympathischen Gesicht mit der Stumpfnase, den scharf herausgearbeiteten Wangenknochen und den kleinen, schwarzen, blanken Augen.* (T. K. S. 293)

一行目のコンマで句切られた *fest frisiert und an den Seiten schon leicht ergraut* は本来 *Ihr braunes Haar, das fest frisiert und an den Seiten schon leicht ergraut war,* という関係代名詞で導かれる副文であるが、関係代名詞と定動詞が省略され、分詞句になってしまったのである。

これも副文として取り扱っていない。

この付結文には、単一文と付結文が並列して現れる対結付結文 (Reihengefüge) や主文がそれぞれ副文を伴って並列的に現れる付結対結文 (Gefügereihe), つまり英文法でいうところの混文 (Mixed Sentence) をも含んでいる。

表Ⅲ 文構造による分類

作品	文種	文相当句	単一文	対結文	付結文	計
	K. u. M.	文の数	2 (2)	33 (33)	20 (20)	45 (45)
	語数	8 (0.37)	235(10.82)	325(14.96)	1,604(73.85)	2,172
U. R.	文の数	8 (8)	24 (24)	29 (29)	39 (39)	100
	語数	67 (3.04)	339(15.40)	639(29.02)	1,157(52.54)	2,202
T. K.	文の数	58(5.18)	314(28.06)	190(16.98)	557(49.78)	1,119
	語数	163(0.76)	2,554(11.94)	3,460(16.18)	15,210(71.12)	21,387

( ) 内は%を示す。

表Ⅲによると三人の間にはかなり大きな差異が存在する。文相当句はグラス、マン、ヘッセの順に多く、とくにヘッセが8%と高率を占めているのが目立つ。文相当句と単一文を合計したパーセントは、三人共32~35%の範囲に収まり、ほぼ同じ比率であるが、対結文、付結文の方へ目を移すと、ヘッセはグラスやマンに較べると対結文の割合が高く、グラスの1.45倍、マンの1.7倍の対結文を書き、逆に付結文はグラスやマンより少なく、グラスの0.87倍、マンの0.78倍の付結文しか書いていない。即ちヘッセは文相当句8%, 単一文24%, 対結文29%, 付結文39%と特定の文種に片寄ることなく、それぞれを平均的に書いている。

グラスでは単一文33%, 対結文20%, 付結文45%と対結文の比率が小さく、付結文の比率が高くなっている。マンに至ってはいっそう対結文の比率が下がり、反対に付結文が全体の約50%を占めるまで上昇している。

また語数と関連づけると、ヘッセはグラスやマンより長い単一文を書き、グラスはヘッセやマンより短い対結文を書いている。一般的にいつて付結文では他の文種より語数が多くなるのだが、その比率はグラスとマンでは異なる。グラスでは付結文の割合が45%と、マンよりおよそ5%低いのだが、語数の割合では約2.7%マンより、付結文で使用される語数の比率が逆に高くなっている。それではグラスの文体は、マンの文体より重畳体なのであろうか。この疑問を解明するため、次節で副文の従属的階層を調べてみる。

### 3. 副文の従属的階層

まず付結文を分析し、それぞれの付結文がいくつの主文といくつの副文とから成り立っているか調べてみる。

表IV 付結文における主文と副文の組合せ

主文の数	副文の数	K. u. M.	U. R.	T. K.
1	1	9 (20.00)	12 (30.77)	169 (30.34)
	2	7 (15.56)	4 (10.26)	67 (12.03)
	3	2 (4.44)	2 (5.13)	20 (3.59)
	4	—	1 (2.56)	11 (1.97)
	5	—	1 (2.56)	5 (0.90)
	6	—	—	1 (0.18)
	7	—	—	1 (0.18)
	8	—	—	1 (0.18)
2	1	8 (17.78)	8 (20.51)	80 (14.36)
	2	3 (6.67)	1 (2.56)	44 (7.90)
	3	2 (4.44)	1 (2.56)	22 (3.95)
	4	1 (2.22)	—	14 (2.51)
	5	—	—	5 (0.90)
	6	—	—	3 (0.54)
	7	—	—	1 (0.18)

3	1	3 ( 6.67)	6 (15.38)	33 ( 5.92)
	2	3 ( 6.67)	—	11 ( 1.97)
	3	—	1 ( 2.56)	9 ( 1.62)
	4	—	—	6 ( 1.08)
	5	—	—	2 ( 0.36)
	7	—	—	2 ( 0.36)
	4	1	2 ( 4.44)	1 ( 2.56)
2		—	1 ( 2.56)	8 ( 1.44)
3		1 ( 2.22)	—	7 ( 1.26)
4		—	—	2 ( 0.36)
6		—	—	1 ( 0.18)
5	1	—	—	2 ( 0.36)
	2	—	—	3 ( 0.54)
	4	1 ( 2.22)	—	—
	7	—	—	1 ( 0.18)
	8	—	—	1 ( 0.18)
	12	—	—	1 ( 0.18)
6	1	—	—	1 ( 0.18)
	4	—	—	1 ( 0.18)
7	1	—	—	2 ( 0.36)
	2	—	—	1 ( 0.18)
	5	—	—	2 ( 0.36)
8	3	—	—	1 ( 0.18)
9	2	1 ( 2.22)	—	—
	5	1 ( 2.22)	—	—
10	2	1 ( 2.22)	—	—
付結文の数		45 {主文 109 副文 80	39 {主文 69 副文 60	557 {主文 1,033 副文 1,047

( ) 内は%を示す。

一つの主文と一つの副文とから成る付結文はグラス 20%、ヘッセ 30.77%、マン 30.34%といずれも最も高い割合である。ヘッセは主文 4 個と副文 2 個と

から成る付結文の範囲内に限られ、しかも1個の副文から成る付結文の数が27と、全体の69%を占め、二つの副文から成る付結文を含めると85%にまで達する。グラスは10個の主文と2個の副文とから成る付結文まで、その分散が激しい。しかし、彼の場合も1個の副文から成る付結文は全体の49%と三人のうちでは最も低いが、2個の副文から成る付結文を含めると82%と、ヘッセに次ぐ高い割合を占める。マンの場合は8個の主文と3個の副文とから成る付結文までに分散し、その分散の度合いはグラスより小さい。マンの、1個の副文から成る付結文は全体の54%と、ヘッセより15%低いがグラスより5%高く、2個の副文から成る付結文まで含めると78%と、逆にグラスより4%低くなる。

グラスでは前節で調べたごとく、付結文の割合が高く、その使用される語数の比率もマンより高くなっているが、主文に対する副文の数は109対80で、その比率1:0.73はヘッセの同様な数値69対60、1:0.87よりも低いという結果がでた。マンは二人とは反対に、主文1033、副文1047で、その比率は1:1.01となり副文の数が主文の数をうまわっている。ということは、グラスは付結文で多くの語を費やしてはいるが、それは副文よりも主文の方に多く使用されているといえよう。

表V 副文の従属的階層

階 層	K. u. M.	U. R.	T. K.
第 一 段 階	40 (88.89)	37 (94.87)	438 (78.64)
第 二 〃	5 (11.11)	2 (5.13)	100 (17.95)
第 三 〃	—	—	17 (3.05)
第 四 〃	—	—	2 (0.36)
計	45	39	557

( ) 内は%を示す。

表Vは付結文における副文の従属的階層、即ち付結文が第何段階までの副文を有しているかの統計である。グラス及びヘッセの付結文が、いずれも第二段

階の副文までしか持っていないのに対し、マンでは第四段階の副文までである。この結果、マンの文体が最も重疊的であり、グラスの付結文は成程全体の45%と多く、また語数も多く使用されているが、かなり平坦な構造から成り立っている、ということが明らかになった。

次に三人の作品から語数の最も多い文をそれぞれ三つ取り出し、実際にその構造を検証してみる。

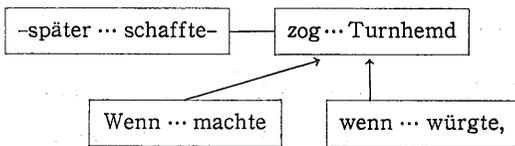
(a) ギュンター・グラスの場合

1. (88語から成る文)

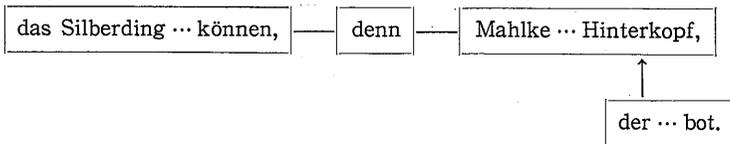
Wenn er am Reck Kniewellen machte - später gelang es ihm, in mieser Haltung zwei Kniewellen mehr zu drehen als Hotten Sonntag, unser bester Turner, schaffte - wenn Mahlke also seine siebenunddreißig Kniewellen würgte, zog es ihm den Anhänger aus dem Turnhemd und das Silberding wurde siebenunddreißigmal, immer seinen mittelbraunen Haaren voraus, um die knirschende Reckstange geschleudert, ohne vom Hals loskommen und Freiheit gewinnen zu können, denn Mahlke hatte außer der bremsenden Gurgel jenen ausladenden Hinterkopf, der mit Haaransatz und deutlichem Knick dem rutschenden, durch Kniewellen entfesselten Kettchen Halt bot. (K. u. M. S. 531)

この文は4個の主文(うち1個は挿入文)と、従属接続詞 wenn に導かれる2個の副文及び関係代名詞 der に導かれる1個の副文とから成立している。まず時の反復を意味する従属接続詞 wenn による副文 Wenn er am Reck Kniewellen machte 「彼が鉄棒で足掛け回転をするときには」が前置され、次にダッシュに挟まれた注釈を意味する挿入文が続き、さらに wenn に導かれた副文 wenn Mahlke also seine siebenunddreißig Kniewellen würgte 「即ちマールケが37回足掛け回転をやっとの思いでなしとげたときには」が、前の副文を詳しく言い換え、次の主文 zog es ihm den Anhänger aus dem Turnhemd 「彼のトレーニングシャツからペンダントが飛び出した」に結合し

ているのである。この主文に das Silberding wurde sibenunddreißigmal, immer seinen mittelbraunen Haaren voraus, um die knirschende Reckstange geschleudert, ohne vom Hals loskommen und Freiheit gewinnen zu können「銀のペンダントは首から離れて自由を獲得することなしに、いつもほどよい栗色の髪の毛に先立って、ぎいぎいきしむ鉄棒を37回まわった」という、不定詞句を含む主文が und で結ばれ、その理由を表す主文 denn Mahlke hatte außer der bremsenden Gurgel jenen ausladenden Hinterkopf「何故なら マールケにはブレーキの役目を果たす喉仏のほか例の突き出た後頭部があったからである」が並列結合され、さらに Hinterkopf を先行詞とする関係代名詞 der に導かれた関係文 der mit Haaransatz und deutlichem Knick dem rutschenden, durch Kniewellen entfesselten Kettchen Halt bot「髪の毛の生え際とはっきりした折れ目で足掛け回転によって解放され滑り出した首飾りを引き止める」が続いているのである。この文は後半部に重点が置かれ、マールケの喉仏が異常に大きいこと、後頭部が突出していることをいわんとするものである。そのことにリアリティを持たせるため、グラスはマールケに足掛け回転を37回もさせているのである。いわばこの文は und を中心にその前後で、二つのブロックに分けられる。



このブロックで後半部へ続く状況を設定し、

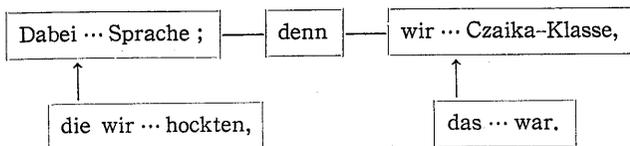


後のブロックで、ペンダントが首から離れても落ちない程、マールケの喉仏は大きく、後頭部は突き出していた、というその異常さがリアリティを獲得しているのである。二つのブロックは und で対等に結ばれ、この付結文は構造的にある一点に凝集しているのではなく、第一のブロックは und に伸介され、なめらかに後半部へ流れ込んでいるのである。

## 2. (107語から成る文)

Dabei hatte keiner von uns, die wir dürr und langarmig zwischen seitlich wegragenden Knien auf den Resten der Kommando-  
brücke hockten, von Mahlke verlangt, nochmals in den Bugraum  
des abgesoffenen Minensuchbootes und in den mittschiffs ansto-  
ßenden Maschinenraum zu tauchen, etwas mit seinem Schrauben-  
zieher abzufummeln, ein Schraubchen, Rädchen oder was Dolles :  
ein Messingschild, dichtbeschrieben mit den Bedienungsanweisungen  
irgendeiner Maschine in polnischer und englischer Sprache ; denn  
wir hockten ja auf allen über dem Wasserspiegel ragenden Brücken-  
aufbauten eines ehemaligen, in Modlin vom Stapel gelaufenen, in  
Gdingen fertiggestellten polnischen Minensuchbootes der Czaika-  
Klasse, das im Jahr zuvor südöstlich der Ansteuerungstonne, also  
außerhalb der Fahrrinne und ohne den Schiffsverkehr zu behindern,  
abgesoffen war. (K. u. M. S. 528)

この長い付結文は並列接続詞 denn によって結ばれた主文2個と、wir という人称代名詞を伴う関係代名詞 die 及び関係代名詞 das に導かれた2個の副文とから成立しているにすぎない。



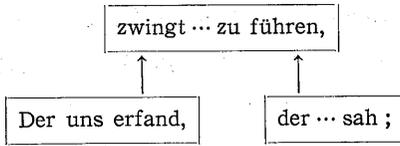
denn の前では少年達の無邪気な遊びが描かれ、のどかではあるが、die wir に導かれる副文「瘦せて長い腕をし、膝を横に張って艦橋の上にまたがっていた僕達」に少年達が規定されることによって、必ずしも少年達を取り巻く環境、時代が幸福なものではないということが示されている。denn の後はポーランドの掃海艇に関する叙述である。この文が長くなっている要因として、最初の主文の「何かドライバーで取りはずすよう」の etwas の同格語 ein Schraubchen, Rädchen oder was Dolles 及び was Dolles を言い換えた ein Messingschild とそれを修飾する副文の短縮形としての, dichtbeschrieben ~Sprache までの分詞句、さらに Brückenaufbauten を規定する, eines ~Minensuchbootes までの二格が挙げられる。これらは計31語から成り立っているのである。

### 3. (130語から成る文)

Der uns erfand, von berufswegen, zwingt mich, wieder und wieder Deinen Adamsapfel in die Hand zu nehmen, ihn an jeden Ort zu führen, der ihn siegen oder verlieren sah; und so lasse ich am Anfang die Maus über dem Schraubenzieher hüpfen, werfe ein Volk vollgefressene Seemöwen hoch über Mahlkes Scheitel in den sprunghaften Nordost, nenne das Wetter sommerlich und anhaltend schön, vermute, daß es sich bei dem Wrack um ein ehemaliges Boot der Czaika-Klasse handelt, gebe der Ostsee die Farbe dickglasiger Seltersflaschen, lasse nun, da der Ort der Handlung südöstlich der Ansteuerungstone Neufahrwasser festgelegt ist, Mahlkes Haut, auf der immer noch Wasser in Rinnsalen abläuft, feinkörnig bis graupelig werden; doch nicht die Furcht, sondern das übliche Frösteln nach zu langem Baden besetzte Mahlke und nahm seiner Haut die Glätte. (K. u. M. S. 527~528)

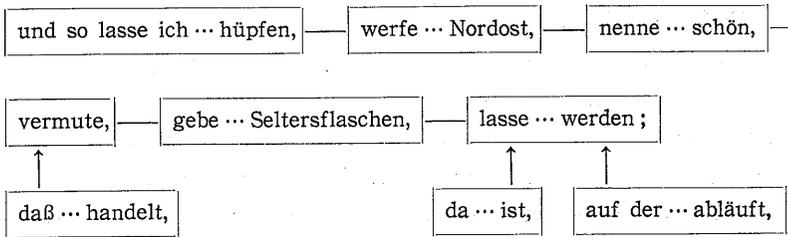
この文は二つのセミコロンのによってA, B, Cの三つのブロックに分けられる。

### Aブロック



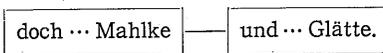
Der は不定関係代名詞 Wer と同じ意味で使用されている。まず Der uns erfand 「僕達をでっち上げたやつ」、その男（つまり作者）が主語になって A ブロックは展開され、筋の担い手は作品中の語り手僕へと移っていく。君の喉仏（マールケの）が物語で重要な役割を演じるらしく、そのことがここで暗示されている。

### Bブロック



ich が主語である主文 6 個と副文 3 個とから構成される。Bブロックでは中心が完全に語り手僕に移り、彼の、気ままな行為が次々と叙述される。

### Cブロック



主語 das übliche Frösteln（よくあるような寒気）が共通で、und で結ばれることによって、主語は後文では省略されている。中心はマールケである。セミコロンを間に挟んで中心が作者→語り手(僕)→マールケと移っていくこの付結文は、主文 9 個と第一段階の副文 5 個とから構成される平面的な文である。

(b) ヘルマン・ヘッセの場合

1. (55語から成る文)

Er besaß gleich ihnen eine breite, gesunde Figur, eine leidliche kommerzielle Begabung, verbunden mit einer aufrichtigen, herzlichen Verehrung des Geldes, ferner ein kleines Wohnhaus mit Gärtchen, ein Familiengrab auf dem Friedhof, eine etwas aufgeklärte und fadenscheinig gewordene Kirchlichkeit, angemessenen Respekt vor Gott und der Obrigkeit und blinde Unterwürfigkeit gegen die ehernen Gebote der bürgerlichen Wohlanständigkeit. (Ü. R. S. 7)

主語 Er, 述語動詞 besaß 及び7つの目的語から成る単一文である。

Er besaß +	{	1 eine breite, gesunde Figur,
		2 eine leidliche kommerzielle Begabung,
		3 ein kleines Wohnhaus mit Gärtchen,
		4 ein Familiengrab auf dem Friedhof,
		5 eine etwas aufgeklärte und fadenscheinig gewordene Kirchlichkeit,
		6 angemessenen Respekt vor Gott und der Obrigkeit
		7 blinde Unterwürfigkeit gegen die ehernen Gebote der bürgerlichen Wohlanständigkeit.

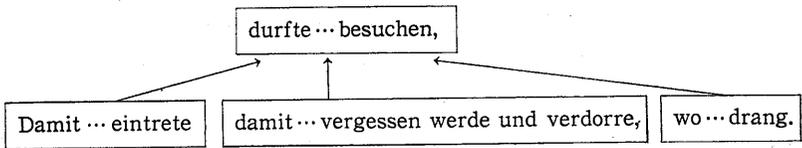
二番目の目的語を verbunden mit einer aufrichtigen, herzlichen Verehrung des Geldes, という分詞句が修飾し、「かなりの商才」を、それが「率直な、心からの金銭崇拜」によるものであることを明らかにしている。この単一文は、商人である彼がどのような人物であるか、さまざまな角度から説明しているのだが、定動詞の次に gleich ihnen (彼らと同じように) が付加されることによって、何も彼が特異な人物ではないこと、他の町人達も彼と同じような人物であることが明らかにされる。長文ではあるが、その構造は単純で、

読者にとっては語数の多い割には理解がきわめて容易である。

## 2. (56語から成る文)

Damit jedoch keine geistige Überlastung eintrete und damit nicht etwa über den Verstandesübungen das Gemüt vergessen werde und verdorre, durfte Hans jeden Morgen, eine Stunde vor Schulbeginn, den Konfirmandenunterricht besuchen, wo aus dem Brenzischen Katechismus und aus dem anregenden Auswendiglernen und Aufsagen der Fragen und Antworten ein erfrischender Hauch religiösen Lebens in die jugendlichen Seelen drang. (U. R. S. 10)

主文1個と副文4個とから成る付結文である。



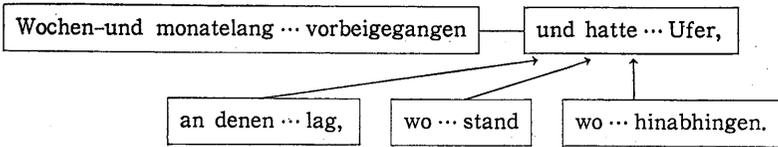
目的を意味する従属接続詞 *damit* で導かれた副文「しかしながら精神的負担が生じないように」と、同じく *damit* による二つの副文「知性の練磨にまぎれて情操が忘れられたり、枯れたりしないように」が *und* で並列に結合され、主文の前に置かれ、主文の意味を明確に規定している。さらに後置された、時の関係副詞 *wo* に導入される関係文が主文の堅信礼のための聖書講読授業を規定している。このように4個の副文は主文に整合され、引き締った付結文を構成しているが、立体感には乏しい。

## 3. (73語から成る文)

Wochen- und monatelang war er Tag für Tag seine vier Mal hier vorbeigegangen und hatte keinen Blick für die kleine gotische Brückenkappelle gehabt, noch für den Fluß, noch für die Stellfalle,

Wehr und Mühle, nicht einmal für die Badwiese und für die weidenbestandenen Ufer, an denen ein Gerberplatz neben dem anderen lag, wo der Fluß tief, grün und still wie ein See stand und wo die gebogenen, spitzen Weidenäste bis ins Wasser hinabgingen. (U. R. S. 13)

主文 2 個と副文 3 個とから構成される付結文である。



最初の主文「何週間も何か月間も彼は毎日毎日4度ずつここを通っていた」と次の主文「だが橋のたもとの小さなゴシック風の礼拝堂にも、河にも、水門にも、水車場にも、水浴場の草原やしだれ柳の立ち並んだ両岸にさえも、目を向けることがなかった」とが、主語 er を共有するため、und で結合され、後者の er が省略された集約文を作っている。そして und で結ばれた二つ目の主文に、Ufer を先行詞とする an denen に導かれた関係文と、同じく Ufer を先行詞とする 関係副詞 wo に導かれた二つの関係文が und で対等に結ばれ、それぞれ第一段階の副文として従属しているのである。何週間も何か月も毎日4度通いながら、彼が目を向けなかったものは6つもある。この二つの主文は、彼が異常なまでに何か他のものに心を奪われていたことを表現している。そうでなければ、これ程頻繁に通いながら6つのもの、いずれにも目を向けなかったというようなことは起り得ない。即ちこの文は長期にわたる、彼の極度に緊張した精神状況を物語っているのである。

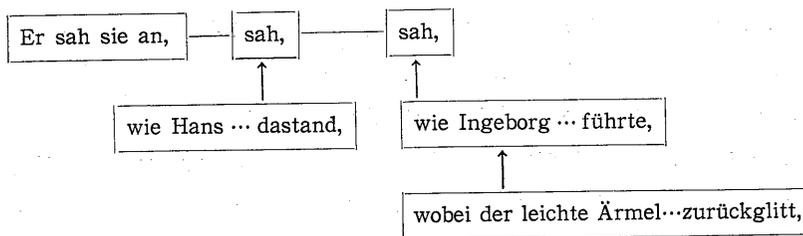
(c) トーマス・マンの場合

1. (94語から成る文)

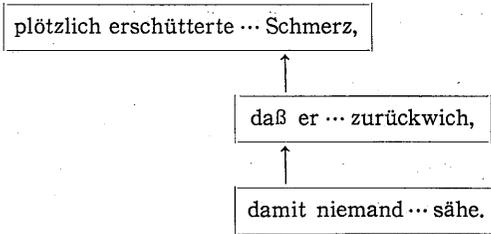
Er sah sie an, sah, wie Hans Hansen so keck und wohlge-

staltet wie nur jemals, breit in den Schultern und schmal in den Hüften, in seinem Matrosenanzug dastand, sah, wie Ingeborg auf eine gewisse übermütige Art lachend den Kopf zur Seite warf, auf eine gewisse Art ihre Hand, eine gar nicht besonders schmale, gar nicht besonders feine Kleinmädchenhand, zum Hinterkopfe führte, wobei der leichte Ärmel von ihrem Ellenbogen zurückglitt, — und plötzlich erschütterte das Heimweh seine Brust mit einem solchen Schmerz, daß er unwillkürlich weiter ins Dunkel zurückwich, damit niemand das Zucken seines Gesichtes sähe.  
 (T. K. S. 331~332)

この付結文の特徴は定動詞 sah が3度繰り返されていることである。主語はいずれも er である。それが一つのブロックとして8行目の -und の前までを構成する。



もう一つのブロックの主語は das Heimweh である。



両ブロックは -und で並列に結合されている。最初の sah は sie（彼ら二人）を目的語とし、次の sah は 従属接続詞 wie に導かれた ハンス・ハンゼンの様子、「ハンス・ハンゼンが昔のとおり昂然と恰好よく、肩幅が広く、腰が細く、いつもの水兵服でそこに立っていた」を副文とし、三番目の sah は同じく従属接続詞 wie によって導入された、二種類のインゲボルクの様子、「インゲボルクがあるとても陽気な様子で笑いながら首をかしげた」と「その手を、大して細くもなく大して上品でもない小娘風の手を、ある所作で頭の後へ持っていった」とを第一段階の副文としてとっている。さらに後者の副文に関係副詞 wobei に導かれる副文、即ち第二段階の副文「そのとき軽い袖口が肘から肩の方へずり落ちた」が従属しているのである。Er sah の sah が3度繰り返され、整理、強調されることによって、本来ならば独立しているはずの副文が主文に凝集し、同時に激しい郷愁に突然襲われるに至るまで、彼（トニーオ）の心を次第に少年時代の想いで満たしていく。第二ブロックの、2個の副文も主文の郷愁へと凝集している。第二段階の副文「誰にも自分の顔の瘡癩を見られないため」は目的を表す従属接続詞 damit を介して、第一段階の副文「彼が心ならずもさらに深く暗闇へ退いた」の中に抱え込まれ、その第一段階の副文は daß を介して主文の中へ取り込まれているのである。

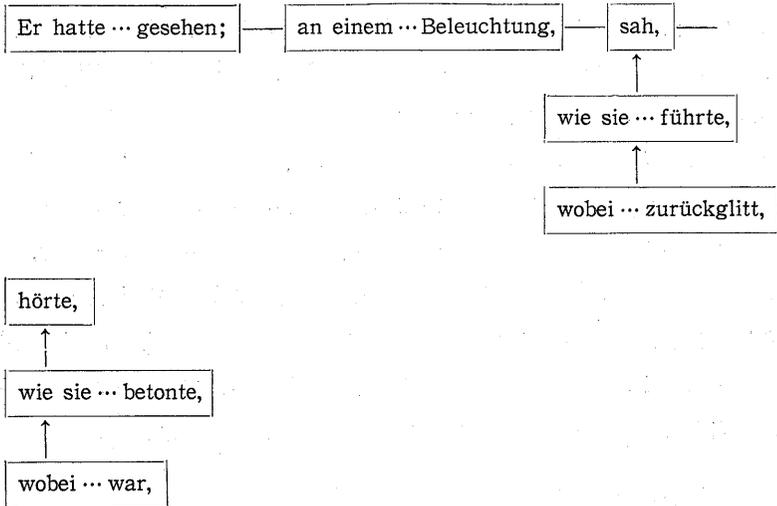
## 2. (113語から成る文)

Er hatte sie tausendmal gesehen; an einem Abend jedoch sah er sie in einer gewissen Beleuchtung, sah, wie sie im Gespräch mit einer Freundin auf eine gewisse übermütige Art lachend den

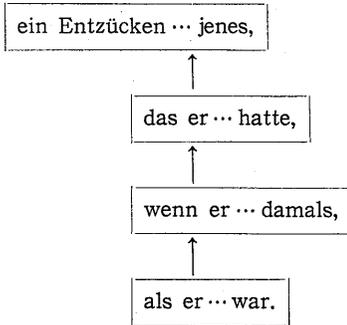
Kopf zur Seite warf, auf eine gewisse Art ihre Hand, eine gar nicht besonders schmale, gar nicht besonders feine Kleinmädchenhand zum Hinterkopfe führte, wobei der weiße Gazeärmel von ihrem Ellenbogen zurückglitt, hörte, wie sie ein Wort, ein gleichgültiges Wort, auf eine gewisse Art betonte, wobei ein warmes Klingen in ihrer Stimme war, und ein Entzücken ergriff sein Herz, weit stärker als jenes, das er früher zuweilen empfunden hatte, wenn er Hans. Hansen betrachtete, damals, als er noch ein kleiner, dummer Junge war. (T. K. S. 281~282)

(1)の例文は呈示部におけるこの場面が再現されたものである。構成もほとんど同じである。それ故 (1)と同様に 9行目のund を境に前後二つのブロックに分けられる。

第一のブロック



## 第二のブロック



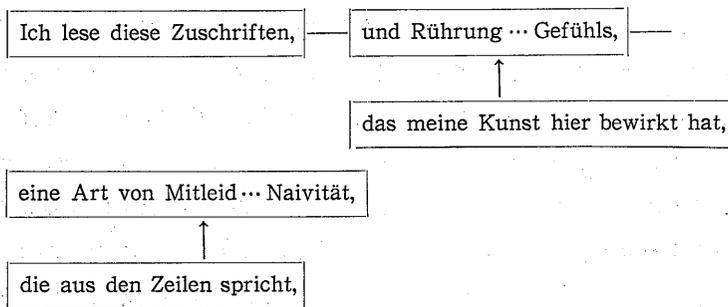
Er hatte sie tausendmal gesehen 「彼は何度となく彼女を見ていた」と過去完了形でトーニオのこれまでの体験が語られ、次の sah で話のある晩のことに限定し、副詞 jedoch を含むことによりその晩彼が見たのは、これまでと違って、ある照明の下にいる彼女であること、と次第に焦点を絞り、さらに三番目の sah で wie に導かれる二つの副文と wobei に導かれる一つの副文とを繋合し、彼が見た彼女の様子が詳しく描写される。それから定動詞は sah から hörte に変わり、即ちインゲの蠱惑的魅力を視覚的に捉えたあと聴覚的描写に移り、彼女からトーニオが受けた聴覚的魅力が表現される。sah は第一段階の副文「彼女がある語に、ある些細な語にある種の調子で力をこめた」と第二段階の副文「そのとき彼女の声の中に、ある暖かい響がある」のを聞いたという二つの副文を繋合しているのである。このように視覚、聴覚の両面から描写することにより、第二ブロックの「歓喜が彼の心を襲った」に至るまでトーニオの感情を盛り上げているのである。さらに als er noch ein kleiner, dummer Junge war 「彼がまだ小さな愚かな少年だった頃」と対比させることで、トーニオがハンス・ハンゼンに憧れた時（2年前）よりも、彼が精神的に成長していることを示し、インゲに恋するトーニオの歓喜をいっそう強めているのである。

### 3. (116語から成る文)

Ich lese diese Zuschriften, und Rührung beschleicht mich angesichts des warmen und unbeholfenen menschlichen Gefühls, das meine Kunst hier bewirkt hat, eine Art von Mitleid faßt mich an gegenüber der begeisterten Naivität, die aus den Zeilen spricht, und ich erröte bei dem Gedanken, wie sehr dieser redliche Mensch ernüchtert sein müßte, wenn er je einen Blick hinter die Kulissen täte, wenn seine Unschuld je begriffe, daß ein rechtschaffener, gesunder und anständiger Mensch überhaupt nicht schreibt, mimt. komponiert... was alles ja nicht hindert, daß ich seine Bewunderung für mein Genie benütze, um mich zu steigern und zu stimulieren, daß ich sie gewaltig ernst nehme, und ein Gesicht dazu mache wie ein Affe, der den großen Mann spielt... (T. K. S. 296)

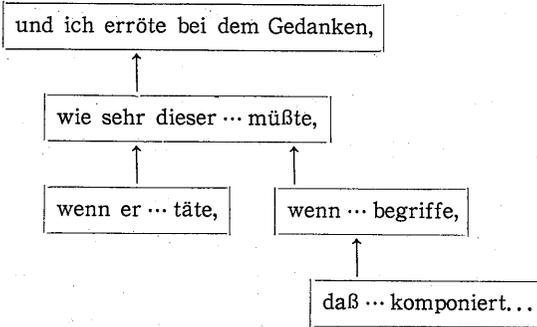
この付結文は9行目の *was alles* の前後で二つのブロックに句切れられ、さらに第一のブロックは5行目の *und* を境に二つに分けられる。

#### 第一のブロック



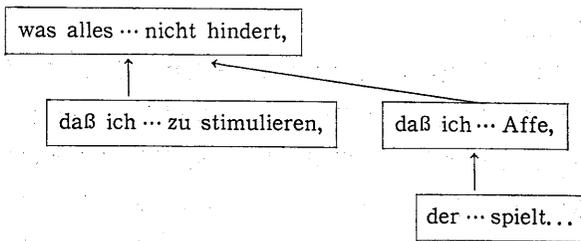
「僕はこちらの手紙を読みます」から始まるこのブロックは、トーニオの、読者から寄せられた手紙に対する心の微妙な変移が語られる。まず彼は「僕の芸術が引き起した、この暖かいつたない人間的な感情に直面して」感動に襲われる。が、次の主文でその感動は一種の同情に微妙な変化をとげる。

第二のブロック



芸術家をいかがわしい存在とみなすトーニオの心は、純真な読者（市民）に対する羞恥心に満たされる。4個の副文はすべて主文の Gedanken に整合されている。即ち第二段階の2個の副文、「もしこの人がひと目でも楽屋裏をのぞいたら」と「もしその人の無垢な心が、～を理解したら」は共に wenn によって第一段階の副文「どんなにかこの正直な人は興ざめしてしまうに違いかろう」に組み込まれ、第三段階の副文「実直で健全で尋常な人間は決して書いたり、演じたり、作曲したりしないということ」は daß を介して、第二段階の、後者の副文の定形動詞 begriffe に凝集しているのである。

第三のブロック



第一段階の副文、「僕の天才に対する その人の嘆賞を利用して自分をたかめたり、鼓舞したりすること」及び「それを大いに真に受け猿のような顔をする

こと」は共に daß を介して主文の nicht hindert に凝集し、これらすべて（前出の読者から寄せられた称讃や感謝の手紙）は、副文の内容を妨げない、という構文である。第二段階の副文「えらい人間をまねる」は関係代名詞 der によって Affe を規定し、第一段階の副文の中に取り込まれる。第三ブロックのトーニオから、終結部の、自己内部に宿る市民への愛を生きる拠り所、芸術創造の基盤とし、倫理的な芸術家である詩人（Dichter）として生きていくという認識、即ち生を生産的なものに転じるまであと僅か一步である。

以上の具体的な分析を整理してみると、グラスの場合、88語の文は主文4個と副文3個、107語の文は主文2個と副文2個、130語の文は主文9個と副文5個とから成り、いずれも付結文ではあるが、主文に較べて副文が少なく、しかもその副文は第一段階までしかなく、語数の多い割には平坦な文体である。ヘッセの場合は、55語の文は単一文で、56語の文は主文1個と副文4個、73語の文は主文2個と副文3個とから成っていて、付結付では副文が主文よりも多い。しかし彼の場合も副文は第一段階止まりで、構造的にはかなり平面的で単純である。マンの場合は、94語の文は主文4個と副文6個、113語の文は主文5個と副文8個、116語の文は主文5個と副文12個とから成り、いずれも主文より副文が多く、しかもその副文は第二、第三段階まであり、グラスやヘッセに較べるとマンの文体は立体的である。

#### 4. 副文の結合形式

主文への副文の従属結合形式は導入語による場合と導入語によらない場合とがある。導入語による場合は、関係代名詞又は関係副詞に導かれる関係文、従属接続詞に導かれる接続詞文、疑問詞による間接疑問文の三つに分類される。導入語によらない副文は、従属接続詞 daß が省略された文、同じく wenn が省略された条件文、同じく obwohl が省略された認容文（この場合、副文中に auch が必ず含まれる）、直接話法の内容文（目的語文）及びコロロンに導かれる内容文に分類される。それではこれまで分析した三つの作品の副文は、どのよ

うな形で主文に従属結合しているのか、その結合形式と頻度を求めてみる。

表VI 副文の結合形式

作品		導 入 語	K. u. M.	U. R.	T. K.
関	関係代名詞	der 型	27 (内一つは wer と同じ意味)	15	307
		welcher 型		2	15
		wer 型	1	—	3
		was 型	2	1	51
		融合型 (wo[r]+前置詞)	—	—	4
		係	副	da (時)	2
文	副詞	wo (場所)	—	2	18
		wo (時)	—	1	5
		worauf (時)	—	—	3
		wobei (時)	—	—	14
		weshalb (理由)	—	—	2
		wohin (場所)	—	—	2
		darin (worin と同じ意味)	—	—	1
接	同	als	8	3	23
		seit	—	—	1
		wenn	8	2	22
		indem	2	—	20
		während	1	1	10
		indes	—	—	2
		solange	—	—	3
統	後時性	bevor	5	—	3
		bis	—	—	1
詞	前時性	nachdem	—	—	4
		kaum~, als	—	—	1
		sobald	1	—	3
文	因果	weil	9	—	27
		da	1	—	8
		indem (daの意味)	1	—	—
		zumal	1	—	—

条件	wenn	—	—	17
	falls	—	1	—
反意	während	1	—	7
	so(währendの意味)	—	—	3
	indes	—	—	6
比較・対照	als ob	—	—	1
	als(obの略)	—	1	16
	wie wenn	—	—	5
	wie als	—	—	1
	wie als (ob の略)	—	—	1
	wie	—	1	33
	als	—	—	1
als daß	—	1	1	
譲歩(認容)	obgleich	1	—	11
	wie sehr	—	—	2
	wenn auch	—	—	4
目的手段	damit	—	3	2
	indem	—	—	2
限定	sofern	—	—	1
	soweit	—	—	1
	daß	2	4	161
	, so daß	—	—	2
	so~, daß	—	3	10
	ohne daß	—	1	2
間接疑問文	wie	1	4	13
	wo	—	1	1
	ob	—	1	10
	wieviel	—	1	—
	wie oft	—	4	—
	wohin	—	1	—
	welcher 型	—	—	5
	was 型	—	—	8

	was für ein 型	—	—	2
	wer 型	—	—	3
導ら 入な 語い に副 よ文	daß の略	—	1	18
	wenn の略	1	—	17
	obwohl の略	—	—	1
	selbst (wenn の略)	1	—	—
	直接話法の内容文	3	5	114
	コロンに導かれた内容文	1	—	9
計		80	60	1,047

※ たとえば一つの導入語が二つの副文を導く場合、その導入語の頻度は2となる。

『トーニオ・クレーガー』の副文1047個は、関係文428個、接続詞文418個、間接疑問文42個、導入語によらない副文159個と分類される。関係文と接続詞文がほぼ同数で、この二種類の副文で81%を占める。『猫と鼠』の副文80個のうち、関係文が32個、接続詞文が41個、間接疑問文が1個、導入語によらない副文が6個で、接続詞文が全体の50%を越え、これに関係文を加えると全体の91%になる。『車輪の下』の副文60個の内訳は、関係文21個、接続詞文21個、間接疑問文12個、導入語によらない副文6個で、関係文と接続詞文が同数あり、両者を合わせると全体の70%になる。これは三つの作品の中で最も低い数字である。間接疑問文は『猫と鼠』、『トーニオ・クレーガー』、『車輪の下』の順で多くなっていて、とくに『車輪の下』では全体の20%を占めている。ヘッセはここでも、関係文35%、接続詞文35%、間接疑問文20%、導入語によらない副文10%と、かなり平均的な数値になっている。

## 5. 対比叙法と矛盾叙法

### （対比叙法）

『トーニオ・クレーガー』では作中人物の形姿、性格、所作或いは場面が類型化され、しばしば対比的に表現されている。まず実生活ではだらしなく、いかなる称讃にも値しない、いかがわしい芸術家と、純朴で、凡庸で、倫理的な

市民との対比（いずれも両存在形式に対するマンの観念が象徴化されたものである）が基本構図として、作品の呈示部から終結部までを貫流している。両者はあくまで平行的で、軌を一にすることは決してない。そして両者の中で市民的気質の父と芸術家的気質の母とから生まれ、両気質を合わせもち、いずれの世界にも落ち着くことができないトーニオが、己の生きるべき道を模索する。だが所詮彼は芸術家として生きていくことしかできない。それ故彼は、芸術家とは対極的存在の市民に対する羨望から永遠に逃れられないのである。以下一つの付結文における対比的表現に限定し、いくつかの具体例を挙げる。

1)

Er ging nachlässig und ungleichmäßig, während Hansens schlanke Beine in den schwarzen Strümpfen so elastisch und taktfest einherschritten... (T. K. S. 272)

なげやりで不揃いな歩き方をするトーニオとすらりとした脚で軽快に拍子正しく潤歩するハンス・ハンゼンが、対立を示す従属接続詞 während によって対比されている。

2)

Wenn du die Schulaufgaben erledigt hast, so nimmst du Reitstunden oder arbeitest mit der Laubsäge, und selbst in den Ferien, an der See, bist du vom Rudern, Segeln und Schwimmen in Anspruch genommen, indes ich müßiggängerisch und verloren im Sande liege und auf die geheimnisvoll wechselnden Mienenspiele starre, die über des Meeres Antlitz huschen. (T. K. S. 276)

「学校の宿題をすますと、君は乗馬の稽古をするか、そうでなければ糸鋸で細工物をする。休暇で海岸にいる時でさえも、君は舟を漕いだり、帆走したり、泳いだりで忙しい」ハンス・ハンゼンと、「何もしないで、ぼんやりと砂の上になぞって、海の顔の上をさっと滑っていく、変幻極まりない表情劇を、

じっと見つめている」トーニオとが、主文との対比を示す従属接続詞 *indes* によって対比されている。

このようにトーニオとハンスは、その形姿、動作のみならず、性格においても対比される。トーニオは『ドン・カルロス』を愛読するが、ハンスにとってはそんな文学作品より、もっと実地的な「馬の本」に興味がある、といった具合である。ハンスは市民社会の英雄的存在、即ち有益な人物として徹底的に理想化され、精神化された生活不適格者トーニオと対比され、対比されることによって両者の特質はいっそう明確になっている。

次のような対比叙法もある。

3)

Aber in dem Maße, wie seine Gesundheit geschwächt ward, verschärfte sich seine Künstlerschaft, ward wählerisch, erlesen, kostbar, fein, reizbar gegen das Banale und aufs höchste empfindlich in Fragen des Taktes und Geschmacks. (T. K. S. 291)

「しかし彼の健康が衰えていくのと同じ度合いで、彼の芸術家気質は鋭くなった、……」精神化されるにしたがって、生物学的に衰弱していくという精神と生の対比である。周知のごとく、このショーペンハウアー哲学は『ブデンブローク家の人々』の基本テーマで、これに則って市民から芸術家が誕生し、同時に一家は没落するのである。

4)

Mehrere Tage war es trüb und regnicht gewesen; jetzt aber spannte sich der Himmel wie aus straffer, blaßblauer Seide schimmernd klar über See und Land, und durchquert und umgeben von rot und golden durchleuchteten Wolken erhob sich feierlich die Sonnenscheibe über das flimmernd gekrauste Meer, das unter ihr zu erschauern und zu erglügen schien... (T. K. S. 326)

「今まで数日間は曇って雨がちだったが、今日は張り切った水色の絹のような空が、きらめきながら澄み渡って、海と陸の上にかかっていた、……」

今日とこれまでの空模様との対比である。こういう天候の描写から始まったその日、トーニオは少年時代に憧れ、恋したハンスとインゲに出会うのである。つまりこの対比叙法は、すでにその日のうちに起るであろう幸福な事件の伏線となっているのである。

対比叙法は付結文ばかりでなく、対結文によっても可能である。が、文単位でなく、文脈にそってもっと大きな単位、たとえば段落の中で考察すれば、いっそう巧妙なレトリックによる対比叙法がみられるであろう。

#### (矛盾叙法)

矛盾叙法は主としてトーニオの心理現象の描写の際に現れる。トーニオの市民へ寄せる思いは、市民を快活な、純朴な正則な、と形容するばかりでなく、大抵の場合凡庸なという形容詞も付随しているように、無条件に肯定的のではなく、精神化された者からのかすかな軽蔑をも含み、矛盾叙法によって表現される。

#### 1)

Denn es war das Merkwürdige, daß Tonio, der Hans Hansen doch um seine Daseinsart beneidete, beständig trachtete, ihn zu seiner eigenen herüberzuziehen, was höchstens auf Augenblicke und auch dann nur scheinbar gelingen konnte... (T. K. S. 277)

「というのは、ハンス・ハンゼンの生き方をうらやんでいるトーニオが、彼を自分の生き方のほうへ引き寄せようと絶えず努めていることは、妙なことだったからである、……」トーニオは、快活で、学校の成績もよく、皆んなから尊敬されるハンスの存在形式に憧れる。が、それにもかかわらず彼は、自分をハンスの生き方へ合わせようと努力するのではなく、自分の観照的で、誰とでも

そりが合わず、孤独な、自ら卑下している生き方のほうへハンスを引っ張り込もうとする矛盾した心理である。到底自分はハンスのようにはなれない、と自覚しているが故の、いじらしくも孤独なトーニオの気持ちが現れている。

2)

Ja, es war in allen Stücken etwas Besonderes mit ihm, ob er wollte oder nicht, und er war allein und ausgeschlossen von den Ordentlichen und Gewöhnlichen, obgleich es doch kein Zigeuner im grünen Wagen war, sondern ein Sohn Konsul Krögers, aus der Familie der Kröger... (T. K. S. 279)

「実際自分には、否応なしに、あらゆる点で変わった所があるのだ。自分は決して緑色の馬車に乗ったジプシーなんかではなく、クレーガー 名誉領事の息子、クレーガー家の一員であるにもかかわらず、孤独で、尋常一般のものから締め出されている。」市民的の世界から疎外されているが、自分はジプシーなんかではなく、ちゃんとした素姓の、しかも町の有力者クレーガー家の息子なんだ、というトーニオの、孤独な寂寥感が、矛盾した心理となっているのである。

彼の、ハンスやインゲへ寄せる愛は報いられず、殊にインゲに至っては彼に対する理解をまったく欠いていて、軽蔑的でさえある。それ故彼の、市民への愛は必然的に苦痛を伴う。苦痛であるにもかかわらず、市民を愛し続ける。

矛盾叙法は、しばしば一つの名詞を複数の、意味が対立する形容詞で規定する語法にも現れる。たとえば von dieser dummen und selig wiegenden Musik (T. K. S. 329) の場合がそうである。dummen (愚かな) と selig wiegenden (快く心を揺する) は、対立的概念で、本来は別々に用いられるはずであるのに、共に Musik を修飾し、Musik を二義的に形容しているのである。このように彼は対象を一義的に規定してしまうのではなく、対象のもつ感覚的な属性をそのまますべて描出しようとする。それ故 mit dem dicken,

blonden Zopf, den länglich geschnittenen, lachenden, blauen Augen und dem zart angedeuteten Sattel von Sommersprossen über der Nase (T. K. S. 282)のごとく、さまざまな意味の形容詞によって一つの対象を規定する表現と共に、対立概念を表す形容詞の列挙も彼の文体の特徴である。

また対比叙法、矛盾叙法は類型化され、繰り返しテキストに現れ、ライトモチーフを形成しているのである。<sup>10)</sup>

## 6. 結 び

マンにはグラスやヘッセに較べると短文も長文も、或いはその中間的長さの文も多い。が、その分散の度合いはグラスよりも小さく、ヘッセよりも大きい。文構造の面から見れば、全文の50%が付結文で、付結文中の主文と副文との比率は1:1.01で、グラスやヘッセとは反対に、副文の数の方が主文の数よりも多く、しかもその副文は第四段階まであり、重層的な文体である。

副文が多く、しかも副文が幾層にも重なり合っている、この彼の文体の特徴は、おそらく、ある対象、即ち人物の形姿、性格或いは心情を描写するに際し、形容詞(句)が数個連続して対象を形容する、もう一つの彼の文体の特徴と同じく、トーマス・マンの、対象を見る目に由来するものであろう。彼は、対象を一義的に規定し、それで事足りたとする作家とは異なって、対象のもつ諸要素をそのまま細大もらさず書くことによって、対象を全体的に描き出そうとする。このマンの、対象に対する態度は主文と副文との関係にも相当し、ある事を表現するためには、その事が具有するさまざまな特性、状況を含めて、まるごと表現しようとする。それ故必然的に付結文が多くなり、副文が幾層にも層をなし、立体的な文体となるのである。おそらく執筆際のマンには、読者にとって読み易いか否かなどということは念頭になく、彼は対象と直に向かい合って、いかに対象を可視的に全体化するかということにのみ専念しているのであろう。対比叙法や矛盾叙法が頻繁に現れるのもそのためと思われる。こ

のマンの方法は対象に対する距離によって支えられ、対象を相対化しているのである。これがマンのイロニーであり、対象に対するイロニーッシュな表現は、そのままマンの、その対象に対する態度である。

[注]

(使用テキスト)

Thomas Mann : Tonio Kröger, in : Gesammelte Werke in dreizehn Bänden, S. Fischer Verlag, Frankfurt a. M., 1974.

Günter Grass : Katz und Maus, in : Danziger Trilogie, Luchterhand Verlag, Darmstadt und Neuwied, 1980.

Hermann Hesse : Unterm Rad, in : Gesammelte Werke in zwölf Bänden, Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M., 1970.

1) Hermann Paul : Prinzipien der Sprachgeschichte, Verlag von Max Niemeyer, Halle A. S., 1920, S.121.

ヘルマン・パウルは「文は必ず1個の定動詞を所有していなければならないというような普及された誤謬に対抗するため」、「文とは話者の中の、数多の表象、或いは表象集団の結合が行なわれたことを、言語によって表現するもの、その象徴であり、聞く者の心の中に、これら同一の表象の同一の結合を発生させる手段である」と定義し、定動詞のない語、或いは語の結合をも文とみなしている。

2) Wolfgang Eichler / Karl-Dieter Bunting : Deutsche Grammatik, Athenäum Verlag, Kronberg/Ts., 1978, S. 32.

「文とは文法体系の統一体であり、その中に述べられた発話に関してまとまった意味統一体であり、……格変化した名詞と人称変化した定動詞が結びついたものである」と定義しつつ、省略文 (Satzellipse) もその背後に文があり、文脈に結びつけられているという理由から文とみなしている。

3) Hans Eggers : Deutsche Sprache in 20. Jahrhundert, R. Piper & Co. Verlag, München, 1978, S. 31. (引用は 岩崎英二郎氏訳『二十世紀のドイツ語』, 白水社, 1975を拝借した。)

4) *ibid.*, S. 32.

5) 6) 7) *ibid.*, S. 33f.

8) *ibid.*, S. 41.

9) Der Große Duden, Band 4, „Grammatik“, Bibliographisches Institut, Mannheim, 1973, S. 580ff.

10) ライトモチーフに関しては、拙稿：『トニーオ・クレーガー』——その作品構成上の音楽性について——、「かいろす」第20号 (収載), 1982, 113~131頁を参照していただきたい。

## Der Stil von Thomas Mann

### — Im Vergleich mit Günter Grass und Hermann Hesse —

Takeshi OBA

In der vorliegenden Arbeit habe ich alle Sätze in Thomas Manns „Tonio Kröger“ analysiert und den oft mit einem komplizierten Gebäude verglichenen Stil untersucht. Dazu habe ich die je ersten 100 Sätze aus „Katz und Maus“ von Günter Grass und aus „Unterm Rad“ von Hermann Hesse analysiert, um sie mit dem Stil Thomas Manns zu vergleichen. Die Arbeit besteht aus folgenden Abschnitten.

1. Länge des Satzes
2. Satzbau
3. Grad der Abhängigkeit der Nebensätze
4. Formen der Subordination im Satzgefüge
5. Gegensätze und Widersprüche in seiner Diktion

Günter Grass schreibt gern extrem kurze oder extrem lange Sätze. Satzgefüge betragen bei ihm 45% der Sätze insgesamt, sie gehen aber nur bis zum zweiten Grad der Abhängigkeit der Nebensätze. Seine Hauptsätze sind in der Überzahl gegenüber den Nebensätzen. Deshalb erscheint sein Stil ziemlich eben.

Wenn ich quantitativ, d. h. aus den kürzeren Sätzen, dem einfacheren Satzbau und dem geringeren Grad der Abhängigkeit der Nebensätze ein Urteil über Hermann Hesses Stil fälle, glaube ich sagen zu können, daß er dem Leser verständlich ist, ohne ihn zu überanstrengen.

Bei Thomas Mann betragen Satzgefüge 50% aller Sätze. Da seine Nebensätze im Gegensatz zu G. Grass und H. Hesse in der Überzahl gegenüber den Hauptsätzen sind und es darin viertgradige Abhängigkeit gibt, konnte ich mich überzeugen, daß sein Stil aufgeschichtet und kompliziert ist.

Sein charakteristischer Stil, daß er mehr Nebensätze als Hauptsätze benutzt, die sich mehrfach aufschichten, so wie eine andere Eigentümlichkeit seines Stils, daß mehrere Adjektive durch Häufung seinen Gegenstand bestimmen, wenn er Gestalt, Charakteristika, Haltung oder Psyche der Figuren schildert, stammt wohl aus dem Objekt betrachtenden Auge Thomas Manns. Thomas Mann unterscheidet sich dadurch von den Autoren, die ihre Gegenstände mit nur einem Ausdruck bestimmen. Er drückt sie ganzheitlich dadurch aus, daß er ihre Erscheinungsformen bis in alle Einzelheiten beschreibt. Die Haltung Thomas Manns gegenüber seinem Gegenstand entspricht seiner Haltung zu Haupt- und Nebensatz, und wenn er irgend etwas ausdrücken will, drückt er das fast immer mit verschiedenen Eigenschaften und Situationen aus. Als Folge werden Nebensätze häufig und vielschichtig, wird sein Stil so plastisch.

Beim Schildern bedenkt er wohl gar nicht, ob sein Stil dem Leser verständlich sei, sondern er vertieft sich nur darin, wie er seine Gegenstände sichtbar machen und ganzheitlich gestalten könne, indem er sich ihnen vollkommen zuwendet. Daß er zahlreiche Gegensätze und Widersprüche in seiner Diktion verwendet, hat wohl den gleichen Zweck. Seine Distanz von den Gegenständen relativiert sie. Das ist seine Ironie, und der ironische Ausdruck über die Gegenstände ist seine Haltung ihnen gegenüber.